

ミュージアムの仕事図鑑 「なおす」編

ナラティブ（物語）の修復

震災が加速させたこと

東日本大震災以降、メディアテークで継続的に考えてきたことのひとつに「ナラティブ（物語性）」があります。私たちは災害による破壊や喪失を経験し、過去との連続性が絶たれ、忘却は加速度的に進んでいるようにも思えます。だからこそ、「なおす」を主題に制作する青野文昭さんの個展を通じて「ナラティブの修復」を試みたいと思っています。

息の長い抵抗から、関係性の回復へ

青野さんは1996年から「なおす」を主題に制作していますが、壊れたものの機能を修復・復活させようとはしていません。では、何をなおそうとしているのか？一言で表すと「ものと人間との関係性」です。ものは基本的には、役に立たなくなると捨てられますが、ものを「役に立つ・立たない」という尺度ではかるのをやめれば、別の面が見えてきます。初期作品は、ものが大量廃棄される現代文明への「ささやかふうな抵抗」とも捉えられ、批判精神があります。ですが、攻撃的に告発するのではなく、「ケア」のような手つきで、息の長い抵抗を試みってきたようにも思えます。

ところが、津波の凄まじいエネルギーは、家財道具や車などを一瞬にして瓦礫と化しました。さすがに、青野さんも手に負えなさは感じたと思いますが、震災後の作品には人型が多く登場し、ものというスケールを超え、住空間や路地のような風景にまでひろがりを見せています。それらは、「地域と人間との関係性」をも、紡ぎ出そうとしているように思えるのです。

せんだいメディアテーク
学芸員 清水建人さん

足下に眠る歴史、死者たちの声など、封じ込められてきたものを解放し、物語る機会になればと思います



「コンニチハ技術シテノ美術」展示風景 (2017年、せんだいメディアテーク)
写真撮影:小岩 勉



「コンサベーション ピース ここからむこうへ」展示風景 (2017年、武蔵野市立吉祥寺美術館)
写真撮影:山中慎太郎、画像提供:武蔵野市立吉祥寺美術館

「青野文昭 展
ものの、ぬむり、越路山、こえ」
2019年11月2日(土) - 2020年1月12日(日)
※11/28、12/29 - 1/3は休館
11:00 - 20:00 (入場は19:30まで)
一般500円 (高校生以下無料)

もつと知る

せんだいメディアテーク

☎ 仙台市青葉区春日町2-1 ☎ 022-713-4483 〇 9:00 - 22:00 (施設により異なる)
📍 第4木曜 (12月を除く)

ミュージアムでは作品や文化財などを「なおす」ことも大切な仕事のひとつです。でも、そもそも「なおす」ってどんなこと？ 辞書には「修理する」「整える」「変換する」などの意味が並びますが、ミュージアムの「なおす」には、もっとたくさんのことが含まれているようなのです。学芸員へのインタビューを通して、ミュージアムがとりくむ「なおす」をご紹介します！



文化財レスキューと復興キュレーション

文化財レスキューから 浮かび上がった問い

東日本大震災と津波により沿岸部のミュージアムは大きな被害を受け、東北学院大学は大学博物館を窓口として被災資料を受け入れる「一時保管施設」になりました。牡鹿半島の「石巻市鮎川収蔵庫」から文化財を救出し、本学の学生たちを中心に脱塩作業、二酸化炭素殺虫処理、修復、民俗資料の台帳作成にあたりました。しかし、その過程で「文化財はなぜ、大事なの?」「なぜ、なおしたり、残したりする必要があるの?」という根本的な問いが浮かんできたのです。



「石巻市鮎川収蔵庫」から救出した文化財は、4トラック8台分



牡鹿公民館の跡地で開催した展示。地元住民の方にお話を聞く

東北学院大学
教授
加藤幸治さん

壊れていないものでも「なおす」必要があるかもしれません。それは、文化財の価値を都度「問いなおす」という意味です

すくう→のこす→ つなげる→かたりあう

文化財の価値は永久不変のものと捉えがちですが、じつは、常に揺れ動いています。特に生活に根ざした民具などの民俗資料は、生活様式の変遷により忘れられたり、再評価されたりする。救出した文化財が今後、「地域にとってどのように意義深いものになっていくのか?」を問うたとき、「すくう」「のこす」の先に、「つなげる」「かたりあう」のプロセスが見えてきました。「私たちの暮らしはどのように形づくられ、どこへ向かっていくのか?」。災害からの復興を考えると、アイデンティティの確認や肯定、人々との融和や共感を育む活動は不可欠です。その結果、文化財の価値が発見され、活き活きと継承されていくのだと思います。

加藤幸治 著

『復興キュレーション
語りのオーナーシップで作り伝える
“くじらまち”』(2017年、社会評論社)

もつと知る

治療とケア

2017年10月、東松島沖の定置網にスナメリがかかっていると漁師さんから連絡が入り、すぐに駆けつけました。1才未満で、身体に傷があり呼吸も浅かった。自然界でそのままでは生きていけないだろうと判断し、当館で保護することになりました。治療プールで、感染症の予防や治療などにあたる日々。最初の頃は、水面にとどまりエサも食べず、じっとしていました。それが病気によるものなのか、精神的な不安からくるものなのかのわかりませんが、両方の可能性を考えながら、治療と飼育にとりくみました。つまり、水族館の「なおす」には、病気やケガの「治療」と精神的な「ケア」の両方があるんです。



同館学芸員
伊藤 崇さん



回復したスナメリは、マダイにいたずらしたり、イワシを捕食したり、好奇心も旺盛です



大水槽「いのちきらめくうみ」で元気に泳ぐスナメリ



治療プールの床は上下に動き、水深を30cmから3mまで調整できる

ここぞ知る

仙台うみの杜
水族館

☎ 仙台市宮城野区中野4-6 ☎ 022-355-2222
〇 9:00 - 18:30
(9/7、14、15、21、22、28は21:00まで。入館は各30分前まで)
📍 大人2100円、中・高校生1600円、小学生1100円、
幼児(4歳以上)600円、シニア(65歳以上)1600円

太古をたどり、現代によみがえらせる

富沢遺跡の発掘でみつかった樹木、花粉、シカのフンなどを分析調査した結果、2万年前の仙台あたりは、現代の北海道北部からサハリン南部の気候に近いことがわかりました。冷涼な気候のもとで湿地が広がる環境を具体的な姿として伝えるために、野外展示「氷河期の森」は復元されました。年に2回、専門家の指導のもとに、氷河期にふさわしい木々や草花が育つ森になるよう手入れを続けています。



発掘調査で「種」まで特定できなかった植物は、現代の近い植生を参考に「種」が検討され、復元された

ここぞ知る

地底の森
ミュージアム

☎ 仙台市太白区長町南4-3-1 ☎ 022-246-9153
〇 9:00 - 16:45 (入館は16:15まで)
📍 月曜(祝日の場合は翌平日)、1月・11月の第4木曜(休日の場合は開館)
📍 一般460円、高校生230円、小・中学生110円



地底の森ミュージアム
学芸員 鈴木英梨さん



▲遺跡を大地から切り離さずにそのままの姿で保存写真：仙台市教育委員会

▼地下展示「地底の森」。樹木の根や土の乾燥を防ぐ薬品を独自に開発。ガラスで覆わずに実物を観察できる

場所の役割や意味を見つめなおす

当館の建物は、明治7(1874)年に「旧陸軍歩兵第四連隊」の兵舎として建造され、終戦まで70年間使用され、昭和54(1979)年に仙台市歴史民俗資料館になりました。この地から戦地へ兵士を送り込むために造営された場所が、役割や意味を見つめなおし、残された資料や市民の方々から寄せられた資料とともに戦争の記憶を伝えています。

平成は戦争のない時代でしたが、世界に目を向ければ現在でも戦争や紛争は絶えません。そこに暮らす人々の困窮や悲惨さは続いています。この地の歴史を見つめなおすことで、戦争について感じ、考える機会になればと思います。



仙台市歴史民俗資料館
学芸室長 畑井洋樹さん

企画展では仙台地方を中心に戦争と庶民のかかわりについてご紹介いたします

もつと知る

「戦争と庶民のくらし5」
- 2019年11月10日(日)
9:00 - 16:45
(入館は16:15まで)



館内に兵舎として使用されていた一室を復元。戦中の様子を今に伝える



仙台市歴史民俗資料館



国旗に記された爆撃の記録

仙台市歴史民俗資料館

☎ 仙台市宮城野区五輪1-3-7 ☎ 022-295-3956
〇 9:00 - 16:45 (入館は16:15まで)
📍 月曜(祝日の場合は翌平日)、第4木曜
📍 一般・大学生240円、高校生180円、小・中学生120円